
眠らない街

描述 氷菓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠らない街

【ZPDF】

Z3380BA

【作者名】

描迷 氷菓

【あらすじ】

<http://discol.tuzikaze.com/>

小説お題サイトからお題をいただきました。

「眠らない街」です。

終電の丸ノ内線の乗客は少ない。灰色のスウェットを着ている男がだらりと寝ている。俺の3個隣の席では薄汚い中年オヤジが新聞を広げている。その新聞は12月24日のだろう。日付はもう変わつてる。25日だ。

ネオンで輝く池袋駅に着いたのは午前12時頃。池袋は夜中の昼を迎える。居酒屋の勧誘やコンビニの隣でたむろする少年少女や飲み会帰りのサラリーマンなどで駅前が大きな声を立ててゐる。

横断歩道をそのまま直進する。車なんてのはタクシーしか通らない。料金増し。地下を電車がはり廻つてゐる。いのうにタクシーなど使わないだろつ。

「お兄さんどうだい、飲み放題で1200円だよ」

「カラオケいかがつすかー」

「兄ちゃん、いい女いるよ」

「聖なる夜はどうだい?」

路地に入つていくほど、ひどい勧誘ばかりだ。テレクラ、ラブホ、SMホテル、ナルクラブ……。世の中変なこと考えるやつもたくさんいるもんだ。

西口公園のステージではリズムのいい曲が流れている。ショートパンツに肩が見えるTシャツを着た胸と骨盤がよく強調された女が三人ダンスを踊る。

芸術劇場は改装中でクリスマスだつていうのに閑散としていた。誰が作つたか知らない漆黒のプロックレプリカはそれが真の姿であるよつて電光飾すらされずに聳え立つてゐた。

「よう、遅かつたな」

円形に並んでいる鉄のベンチの端に座っていたのは友人の翔である。ジーンズにこげ茶のレザー、インナーは青のYシャツと茶のカーディガン。御洒落さん。

「こつちは新宿から帰つてきたんだよ」

「歌舞伎町の女とでも遊んできたか?」

「あそこはこことは大違いに繩張り意識が強いんだ。俺なんかがあそこの女に手出したら新宿が俺の墓場になるわ。どうせなら池袋で死にたいね。」

「王様いいこというね。春稀今日相手いないの?」

「俺はお前と違つてヤリチンじゃねえんだよ。ナルクラブにでも行つてろ」

「俺あ、ケツの穴より膣のほうが興味あるんだよ」

「ねえ、ちょっとお兄さんたち暇ー?」前を見ると若い女が一人。他の場所に座るグループが一瞬こちらを睨む。西口公園はいつもナンパと逆ナンの戦場。

「ちょっと私たちと遊んでかない?」まだ17ぐらいだろうか。甘えている子猫のような声で鼓膜を震わせる。「うち、あなたのことが知つてるよ。春稀さんと翔さんでしょー」茶色ストレートのボブ。ネオンでキュー・ティ・クルが煌いている。肩出しのニットからブラの紐が見えている。ジーンズのミニスカから伸びる肌色の脚は肉つきがよい。寒いのによく頑張るものだ。

「知つてるよー」そういうつて笑つたのは、金髪のロングストレート。スキニに流行りのダウン。

「おーまじで?いやー、俺達人気者だなあー。どうする?居酒屋行つちやう?」翔が調子に乗つて立ち上がる。酒に漬れるのは勘弁だ。漬されるのは闇だけでいい。

「どうやら翔はボブの女の子が気に入つたようだ。

「名前なんていうの?」ボブの子が美咲、金髪の子が麻美といつぞ

うだ。俺はちなんにびっちもタイプではない。

「春稀さん何歳なのー？」美咲が胸を協調させながら上田遣い。繁華街に出る。居酒屋やカラオケが多い。街路樹はもつほどんど裸で寒そうだ。

「21」本当のことなんて言つ必要ない。びっせー曰だけの付き合い。一人で歩いているときよりも勧誘が多くなる。特にホテルから。そんなにやつてほしいのか。

みんな裸になつたら、隠さなくなつたら、世界は平和じゃなくなるよ。

「いらっしゃいませー。何名様ですかー」入つたのはチョーン店の居酒屋。座敷に通される。俺以外は生ビール。俺はオレンジジュー。ス。酒は飲みたくない気分だ。

俺等はつまみをつつつき、酒を飲み、翔から出る話を肴にして盛り上がつた。

俺がトイレにいくと立ち上がると麻美も立ち上がつた。並んでトイレへ向かつた。生憎なことにトイレは兼用。この居酒屋はどうにかしている。御先にどうぞ、と彼女を通す。彼女は笑いながら俺の腕をひっぱつて個室へ連れ込む。ガチャと怪しい音。鍵なんて心以外に掛けるものじゃないぞ。

「なにがしたいの？」俺を壁に押し付けて、彼女は体を俺に擦り付ける。足が絡み合う。

「クリスマスだつてのに、一回もイかないなんて悲しくないの？」

「クリスマスは裸になつて重なり合う日だなんて俺は知らないね。

俺はやりたいときにはやりだけさ」彼女は俺の左手を自分の胸に押し付ける。顔が火照つている。ある意味新しい自慰行為だと思つた。

「池袋の王様は女に飢えてないの？」空いている右手で太ももの内側を撫でる。下腹部に触るか触らないかぐらい。焦らしのつまいやつ。

俺はいきおいをつけて、彼女を突き放した。彼女は傷心したようだ。

むつとじりじりをみてくる。

「じめんな。」頭を撫でて俺は個室からでていぐ。ああ、トイレしたかつたのにな。

座敷に戻ると美咲が酔い潰れている。翔が隣で「お開きかな」と苦笑い。麻美が戻ってきて、お開きとなつた。一人は椎名町が家だそうなので冷たい夜風にあたりながら1時間ほどかけて一人を送つた。男は紳士じやなきや。もう一度、西口公園へ戻る。時刻は午前2時半。いつまで経つても明るく、星が点にしかみえない。この星は田舎に行つたら、こここのネオンぐらい美しくみえるのだろうな。

「なあ、知つてるか。クリスマスだつて」翔が濁つた夜空を見上げながらいう。息が白い。

「ああ、知つてる。キリストの誕生日だり」

「死んだ日じゃないの?」

「誕生日だよ」

「へえ…。そういう」とじやねえよ、春稀。クリスマスだつてのこ、一回も挿入してねえよ

「去年は何回入れた?」

「のべ5回ほど」

「ほつ。俺は0回だ」

「キングよ。もつと飢えろ」

「遠慮しとく」

「顔もスタイルもいいんだから、ほいほい女釣れるだろ?」

「全部お前への記念日プレゼント。」

「ほほ毎日じやねえか」

「毎日が俺とお前の記念日」

西口公園を見渡すとわきまでいたグループはもういなくなつていた。陰では浮浪者が固い布団の上で寝ている。

「あつ。こんちわつす、春さん」現われたのは俺の後輩。黒縁眼鏡

の好青年。俺といい勝負の至純さ。「なんすか？ナンパ待ちつか
？男ならガンガンいかないとダメつすよー」

「そういう真澄^{まづみ}はなにやつてんだ。一人だし」隣で翔が真澄ちゃん

久し振りーと二口二口している。いつまでも能天氣。

「俺、クラブの勧誘してるんですよ。どうです？いきません？踊り
ません？」真澄は腰を振つてダンスの真似をする。

「行こうぜ、春稀。どうせ暇だ」翔が言い出せば俺もついていく。
それは決まつているのです。

真澄が案内してくれたクラブは東口にあつた。歩いて20分ほど、
地下に広がる宇宙ほど暗い舞台。大きな音楽が体を包み込む。

「あつちでドリンク買えますから。じゃ、自分はまだ客釣つてきま
すよ」真澄はそう言つてすぐに寒い外へと飛び出していく。熱心な
ところすぐくイケてるメンズだと思つ。

ノイズがひどい曲に耳を澄ませば洋楽の有名なクリスマスソングが
流れている。洋楽には詳しくないのでよくわからない。

雑踏の中、翔とはぐれてしまつた。袖が引っ張られたので振り向く
と、クラブに似合わない女性がいた。狼の群れに迷い込んだ羊のよ
うだ。

「あ、あのー」彼女は背伸びをして俺の肩に両手を乗せて、唇を耳
に近づけた。彼女の吐息が耳に掛かる。くすぐつた。酒の匂いが
するから飲んでいるのだろうか。「ちょっと付き合つてくれません
か！」

俺は頷いて、彼女がなすがままついていつた。彼女は先に進むのだと
が入ごみに潰されているので、俺は彼女に覆いかぶさつて壁際に押
し付けた。

「危ないよ

「ありがとうございます…」彼女が口をパクパクさせている。全然
聞こえないので、耳を口元へ近づける。頬が少し重なつた。吐息が
くすぐつた。『私、愛美^{まなみ}つていいます。真澄くんにあなたのこと

少し聞きました。困つたら、春稀さんのところ行けばいいって「なにか困ってるの？」彼女は照れ臭そうに両手を俺の首へ掛けた。距離はさうじて近くなる。部屋が暑いのか、俺達が暑いのかわからない。

「私の処女を奪つてほしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380ba/>

眠らない街

2012年1月8日20時49分発行